

韓統連大阪通信紙

自主

チャジュ

403号

2024年10月号

자주

発行：韓統連大阪本部 自主編集委員会
〒544-0034
大阪市生野区桃谷3-13-6
TEL06-6711-6377 FAX06-6711-6378
毎月1回発行 購読料年間4000円
郵便振替 00940-7-314392
自主編集委員会

日本にすり寄る尹政権、自尊心の崩壊に悲嘆する韓国国民

次期総裁選に不出馬を表明した岸田総理が9月6日、韓国を訪問して尹大統領と12回目の首脳会談に臨んだ。尹大統領就任以来、2年9ヶ月間に12回の会談が行われた(約2.8ヶ月に1回の割合で首脳会談が開かれたことになる)。

会談では韓米日の緊密な連携が話し合われ、第3国での自国民保護についての協力に関する覚書が発表された。岸田総理の退陣間際の今回の会談は、両国で政権交代があっても今の協力関係が続けられることを確認する会談だったといえる。

尹大統領就任後、韓国の対日外交は大きく変わった。今年の光復節演説で尹大統領は植民地支配など歴史問題や過去清算に触れず「自由と民主主義による統一を目指す」と語り、日本に寛容で、朝鮮に厳しい内容は歴代の大統領演説とは一線を越えたものだった。

尹政権は、ベルリン・ミッテ区に設置された「平和の少女像」の撤去を求める在独日本公館員らによる不当な干渉行動にも無関心を示し、日本軍「慰安婦」問題、強制動員問題に関する大法院判決に対して、日本政府が「判決は国際法違反」などと言いがかりをつけ、日本企業の資産差し押さえなどの強制執行を止めさせるよう輸出制限による貿易関連業務妨害など韓国政府に圧力をかけ、韓国政府は当該財団による第3者弁済などで日本政府の求めに応じるなど、自国の被害者より日本政府への配慮に終始した。

これだけにとどまらず、佐渡鉱山のユネスコ世界遺産登録に関しても、朝鮮人強制連行・強制労

働に関する表記を義務づけることに固執せず、結局登録に反対しなかった、

佐渡鉱山に関しては広瀬貞三福岡大学名誉教授が著した論文「佐渡鉱山と朝鮮人労働者(1939~1945)」に詳しく書かれている、ごく一部を紹介すると「1945年8月15日現在、新潟県内約40ヶ所の事業所に5千人近い朝鮮人が就労中であった。1944年9月から徴用による動員が日本政府と朝鮮総督府が連携し、国策として行われた。忠清南道出身者が80%で主に坑内作業に従事し、ハッパや運搬、削岩夫、支柱夫など危険な作業を朝鮮人が担った。坑内作業は12時間、2交代制で粉塵を吸い込み、いわゆる“よろけ”と呼ばれる珪肺にかかることが多かった。



▲尹政権の対日屈辱外交を糾弾する韓国民衆

待遇は日本人より悪く賃金から労働に必要な道具代等が差し引かれるため、実際手元に残る賃金はごく僅かであった」など極めて劣悪な労働実態が書かれている。

韓国では最近「植民地近代化論」「反日種族主義」など、ニューライト系学者が多く所属する「落星岱経済研究所」の朴イテク所長が独立記念館の理事に任命された。この研究所は過去にトヨタ財団から資金援助を受けていた時期があった。日本軍「慰安婦」は売春婦、強制動員の強制を否定するなどを研究成果として出版する研究者を独立記念館の理事に任命する事態に、韓国国民は怒りを抑えきれない気持ちで、これ以上耐えられないと尹錫悦大統領の退陣を求めて立ち上がっている。(鐵)

戦争準備の仕組みを理解し、 軍拡反対の声をあげよう！ 第2回韓統連セミナー

韓統連大阪本部主催による今年2回目の韓統連セミナー「進みゆく戦争準備の仕組みを解き明かすー韓米日・韓日軍事同盟を許すなー」が9月23日(月)、東成区民センター(大阪市東成区)で開かれた。

セミナーでは、金昌範(キム・チャンボム)韓統連大阪本部代表委員が報告を行った。金代表は初めに、世界の軍事費と武器輸出ランキングを報告しながら「世界が多極化する中でも、世界の軍拡を引っ張るのは米国と中国であり、韓国の軍拡は歴代政権下でよどみなく続けられ、現在の尹錫悦政権は積極的に軍拡を進めている」と指摘した。



▲画像を活用して報告する金昌範代表委員

続いて、尹錫悦政権が発足して今日までの米国・日本との主な会談と合同軍事演習の規模などを紹介し、「韓米、韓米日の合同軍事演習はますます拡大する一方、日本では沖縄周辺における自衛隊基地の建設・拡張などが行われ、軍拡が進められている」と語った。

そして「日本では私たちの年金積立金が軍事企業への投資に利用されている。このような事実が知らされていない中、軍拡は行われており、このような身近な問題を取り上げながら、軍拡に反対していこう」と語った。

報告後は活発な質疑討論、崔誠一(チェ・ソニル)事務局長から韓統連大阪本部の今後の行事紹介が行われ、最後に李鐵(イ・チョル)常任顧問が閉会挨拶を

行った。

韓米日合同軍事演習中止と 尹錫悦政権退陣を訴える！ 第5回鶴橋アクション

朝鮮半島をはじめ東アジアの平和実現を訴える「第5回鶴橋アクション(街頭宣伝活動・主催:韓青大阪府本部、韓統連大阪本部)」が9月28日(土)、JR鶴橋駅前で行われた。



▲韓米日合同軍事演習中止などを訴える参加者

鶴橋アクションでは、参加者が「韓米日共同の戦争準備をやめろ!」「東アジアの平和実現!」と書かれたプラカードを持ちながら道行く人々にアピールを行うとともに、輪番制でハンドマイクを持ち「韓米、韓米日合同軍事演習を中止しろ!」「日本政府は軍拡のために使う税金を能登半島の震災・水害復興にまわせ!などを訴えた。

また今回は、韓統連中央本部で作成した尹錫悦政権退陣を訴えるビラも配布し、尹政権退陣をアピールした。

粘り強い草の根運動を通じ 日朝国交正常化を実現しよう! 日朝ピョンヤン宣言22周年大阪集会

9・17日朝ピョンヤン宣言発表から22年を迎え「日朝国交正常化の早期実現を求める大阪集会(主催:日朝市民連帯・大阪)」が9月13日(金)、エルおおさか(大阪市中央区)で開かれた。

集会では、日朝市民連帯・大阪の大野進共同代表が主催者挨拶を通じ「日朝ピョンヤン宣言が発

表されて22年が経過しましたが、合意事項がいつこうに履行されていません。私は日朝国交正常化が実現されて、最初に実現してほしいのは朝鮮学校の無償化です」と述べながら、「今日の集会であらためて日朝ピョンヤン宣言の精神を共有して、これからも積極的に活動していきましょう」と語った。

次に、朝鮮新報社編集局長の金志永(キム・ジヨン)さんが講演を行った。

金編集局長は初めに「ピョンヤン宣言の精神は、日本の過去清算に基づく国交正常化であるのに、日本政府はその精神を守っていない。特に安倍首相の時代に“拉致問題の解決なしに国交正常化もない”と“拉致3原則”を掲げるなど、国交正常化を望まない勢力が過去の清算を先送りしている」と批判した。

そして「このような現状を打開するためには、

日朝国交正常化を望む方々の草の根運動が大切だ。共に運動を進めていきましょう」と訴えた。



▲講演を行う金志永編集局長

講演後は、日朝市民連帯・大阪事務局の古賀滋さんから岸田首相宛の要請文案が朗読・提案され、拍手で確認し、最後に日朝市民連帯・大阪の長崎由美子共同代表が閉会挨拶を行った。

韓青8月チンチャコリアツアー参加感想文

尹琴淑(ユン・クムスク)

まず現地で活動する同世代の大学生や青年たちと交流する機会が何度かあり、貴重な時間を過ごせました。

私が初めて訪韓した2年前とは情勢の緊張感、統一の現実感がとても厳しい状況になってしまったのですが、それでも変わらず朝鮮半島の平和と自主統一のために自分たちのネットワークを守り、そして広げながら活動を続けている姿に感銘を受けました。朝鮮の新しい対南政策において私自身複雑な心境や戸惑いが全くないわけではないんですが、やはり民衆たちが深く、そして固く団結してこそ国と民族の未来が切り拓けるのではないかと、そういう風に気づかせてくれる機会になりました。

そして、初めてお会いする韓青の方々との関係を築けたことも、私にとってすごく意義深いものになりました。中には今回初めて韓青の活動に参加される方もいらしたし、自分のルーツや朝鮮半島の現状についてあまり詳しくない方もいたんですが、今回のツアーが自分のアイデンティティや祖国との繋がりを初めて知り、これから活動を続けるきっかけになったんじゃないかなと思いました。

今回のツアーを通して出会った方たちとの縁を大切に、私自身が在日コリアンとして出来ることすべきことをこれからも真摯に考え実力を身につけていきたいと思っています。

コマッサムニダ(ありがとうございました)。



▲交流会後の記念写真

第56回韓青全国夏期講習会報告

韓青大阪府本部委員長 趙暎和(チョ・ヨンファ)

第56回韓青全国夏期講習会(はんちよんサマーキャンプ2024)が9月14日から15日の2日間、三重県鈴鹿市のスズカト(三重県立鈴鹿青少年センター)で開催された。東は東京から、西は兵庫まで全国から幹部・盟員が参加した。

1日目、宿舎に集合して昼食を一緒に食べた後、開会式を行った。開会式では講習会を主催する実行委員、班別を担当する班長団、ノレ(歌)指導の紹介があり、さっそくノレ指導から今回の講習会のノレ『바위처럼(パウィチョロム:岩のように)』が紹介された。その後、最初の班別討論では自己紹介や今回の講習会で話したいことを中心に自由な討論が行われた。

1日目の学習会企画は8月に開催された「チンチャコリアツアー」の報告会。韓成祐(ハ・ソウ)韓青中央本部委員長の講演だけでなく、実際にツアーに参加した人たちからも話を聞くことができた。



▲学習企画ではチンチャコリアツアーの成果を共有する

夕食は敷地内の炊飯場でBBQを行った。準備段階から皆で協力し合うのは講習会の一つの醍醐味といったところか。当日は鈴鹿市内で花火大会が開催されており、遠くからではあったが綺麗な打ち上げ花火を見ることができ、参加者たちも楽しんでいた。

夜は講習会期間中としては異例の飲酒OKの交

流会が夜遅くまで続いた。

2日目、午前5時起床(一部は起床できず)で敷地内にある池の真ん中にある休憩所のようなところで日の出を仰いだ。中央委員長肝いりの企画であったが、曇天により残念ながらはっきりとは見えなかった。



▲楽しくBBQの準備をする参加者

宿泊部屋の掃除の後、2日目の学習企画、情勢講演が行われた。朝鮮戦争以降、最悪と言っても過言ではない南北関係の悪化、戦争の危機、尹政権の拒否権乱用政治に対する国民の怒りを目の当たりにした経験をもとに、今後の私たちの運動の展望を皆で考え、議論し、実践していくという決意を新たにしました。

最後の班別討論では、学習会企画の内容を超えて今の在日社会を取り巻く様々な 이슈(京都国際学園、虎に翼、KPOPアイドルの配信に対するバッシングなど)で時間が足りないほどであった。

閉会式では参加者全員から講習会の感想と今後への抱負が語られ、皆でノレを律動も交えて歌い、宿舎を後にした。

PS:鈴鹿まで来て鈴鹿サーキットに行かない選択肢はないので、時間の許す限り、鈴鹿サーキットを満喫し、午後6時、現地解散となった。



【投稿】

韓統連と金大中

金恨(キム・ハン)

先日、韓統連を応援してくれている知人に「韓統連の初代議長は金大中元大統領だ」という話をしたら非常に驚いていた。私は彼が驚いたことに驚いたのだが、韓統連が結成されて半世紀を超えた今、韓統連と金大中氏との関係をあらためて整理するのも意味があると思われる。

●金大中拉致事件

韓統連の前身である韓民統（韓国民主回復統一促進国民会議）は1973年8月、朴正熙軍事独裁政権の下、海外亡命中であった金大中氏と民団内の民主派勢力が中心となって結成された。

韓民統の結成を恐れた朴正熙は結成大会の直前に白昼堂々と東京のホテルから金大中氏を拉致した。現場の遺留品に大型リュックが2つあり、当初は金大中氏を殺害してバラバラにして運ぶ計画であったらしい。拉致現場には北朝鮮製のたばこもあり、「北犯行説」や「自作自演説」が流されたりもしたが、韓民統は即日記者会見を開き、拉致がKCIA（韓国中央情報部）の仕業であることを暴露糾弾した。

当時、金大中氏を知る記者は少なく、金大中氏のインタビューが掲載された雑誌「世界」が配布されたという。「金大中先生救出対策委員会」を立ち上げて大々的に救出運動を展開、日本の世論が大きく動いた結果、金大中氏は5日後にソウルの自宅前で解放された。

日本の首都で韓国の公的機関によって野党の政治家が拉致されるという「金大中事件」は、日本の主権を侵害する前代未聞の大事件であった。KCIAの工作船が利用されたことも明らかになったが、「現場で指紋が発見された金東雲（キム・ドンソ）書記官による個人的犯行」ということで、①金書記官の免職と②金大中氏の海外での言動の責任を問わないということで韓日両政府が合意した。

田中首相（当時）への謝礼金（3億円）疑惑が出るなど、韓日癒着を象徴する常識外れの「政治決着」であった。結成大会の直前に議長が拉致されるという韓統連の波乱の誕生物語である。

●1980年光州「内乱陰謀事件」

1980年の2月、金大中氏の公民権が回復し、自由な政治活動が保障されたことを契機に「金大中先生救出対策委員会」は解散し、金大中氏も韓民統の議長職を降りた。



▲1980年、金大中氏の死刑阻止のために
ハンスト闘争を行う韓民統のメンバー

しかし、韓統連と金大中氏の関係はこれで終わらなかった。

朴正熙を父と仰ぐ全斗煥も「光州事態の背後操縦者」「内乱の首謀者」として金大中氏を殺そうとした。しかし「内乱陰謀の首謀者」では死刑にできないので、韓民統の議長（反国家団体の首魁）であったことを追加起訴して国家保安法違反で死刑判決を下したのだ。この事実

があまり知られていないのには理由がある。韓民統の議長職を問題にすることは「過去の海外での言動を問わない」とした韓日の政治決着に反するので、韓日両政府が公開しなかったのだ。法廷で朗読された判決文と違う内容の判決文を公開するという考えられないでたらめな裁判であった。

韓民統は「金大中先生救出委員会」を再度設置し、第二の救出運動を展開した。100万名署名運動、大規模集会、国鉄電車の抗議の汽笛など「金大中氏を救え」という声は嵐のような日本の世論となり、金大中氏は1981年1月、大法院（最高裁）の死刑判決直後の閣議決定で無期懲役に減刑された。

金大中氏はその後、大統領になり、2000年に史上初めての南北首脳会談を実現させ、ノーベル平和賞も受賞した。金大中氏は韓民統との関連で2度も生命の危機に陥ったが、韓民統のおかげで2度救われた。もし金大中氏が殺されていたら、韓国の歴史はどうなっていたらろう。

【書評】 参加と連帯がつくる変革 韓国社会運動のダイナミズム

三浦まり・金美珍:編集

大月書店・2860円

不二越女子勤労挺身隊・強制連行・強制労働問題支援、日本軍「慰安婦」問題、などで私は1990年代後半から韓国にかかわりを持ち始め、その後、必然的にソウルや光州など訪問の機会を増やしてきた。

そして仁川や金浦の空港から帰国する時、決まって「ソウル市庁舎」を訪れるようになった。なぜか？その当時のソウル市庁舎は日本のお役所と違い、常に解放感にあふれ、自由で、様々な催し物が開催され、私にとって広大な韓国・ソウルの今を知る上でまたとない機会であり、またソウル観光財団から発行された素敵な「ソウル観光ガイドブック」を手に入れることができたのが大きな魅力だった。

さてこの本、序章は「韓国社会運動の歴史の変遷と再生への課題」とされ、第一部：#MeToo運動に結晶化した女性たちのたたかい、第二部：移民国家化する韓国と「外国人労働者」、第三部：住民参加に基づく「協治」の試み、第四部：コロナ禍とエッセンシャル・ワーカーの権利、第五部：活性化するベーシックインカム論争、の各部で構成されている。

序章も含め各部とも韓国と日本在住の研究者たちが執筆陣を構成して様々な写真や図解、データを表示し、各々が付度など無縁な論理で書き記している。この本を書店で購入した後、私は文字通り「ダイナミズム」にあふれるこの本を、どこから読んでいいのか戸惑った。

現在の韓国社会は、私たちが住む日本以上に気の遠くなるような様々な格差社会であり、少子・高齢化がより進行し、そして何よりも現実として「核戦争に一番近い朝鮮半島」にあり、厳として徴兵制度が存在し、それこそ手の届く場所で同じ民族が極限的に対峙するまさに厳しい社会そのものだ。

しかし、この情勢下にあっても垣間見る韓国の人々の表情は、どこまでも明るく、楽天的に見え

てしまう。それはあの日本の植民地からの「解放の日」以降、朝鮮戦争、南北分断、長い軍事独裁政権下の民主主義とは程遠い困難な社会の中で、まさに自分たちの力を行使し、たくましくそれらを克服して勝ち取ってきたという歴史のなせる業というしかない。

あの2016年から始まった「キャンドル革命」に恐る恐る参加した時、私はその数と規模と見事なまでの演出に驚かされ、心底感銘を受けた。それは「人間にはこんなこともできるのだ」という感嘆であり、韓国の人々から得た確信だった。

#MeToo運動が韓国を席卷した時、日本はどうだったのか？普通訪韓した時に私たちの目にはあまり入らない、韓国の外国人労働者の現状はどうなのか？かつて私が目にしたソウル市の行政、自治体と市民住民の在り方の日本との差は何なのか？

コロナ禍とエッセンシャル・ワーカー＝必須労働者とは何なのか？日本ではほとんど話題にもならなかったベーシックインカム論争の現状は？などなど、この本は私たち日本人がほとんど知らないで外見だけで済ましてきた韓国社会の姿を、また現在「世界で一番核戦争の危機に直面している国」韓国のありのままの今を様々な視点から解き明かしてくれている。(井上淳)



編集後記

10月6日、秋晴れの下、第29回統一マダン生野を成功裏に終えることができました。

ご協力して頂いた皆さん、ありがとうございました。次号は統一マダン生野の特集号になります。お楽しみに。(ソン)